

山崎闇斎の神道説について

細谷 恵志

了徳寺大学・芸術学部

要旨

山崎闇斎の学問は最終的には神道に帰着する。その学問の出発点が朱子学であったということが闇斎の日本学に大きな影響を与えたと言ってよい。闇斎の垂加神道は近世に於ける諸種の神道説の中でも極めて特殊な地位を占めている。この垂加神道は、朱子学すなわち宋学に於ける理気説の要素があり、寧ろ朱子学の基底の上に構想されたものと言える。

とくに闇斎の垂加神道と称される思想を理解するために、学問的な理論としての「土金伝」^{つち かねのつたえ}が重要な手がかりである。闇斎は万物を創造し構成する要素の根元を「土」とみなしている。闇斎はとりわけ「土」を重んじ、さらにそこから生じる「金」と合わせて重視したということが分かる。「土」が万物を創造するということは「土」がそうしたものを内包するということであり、「敬」の概念との共通性を見出している。言葉に表れた音としての調べから発展したイメージ、抽象的概念としてこれを捉えたと推察できる。

キーワード：山崎闇斎，垂加神道，朱子学

Yamazaki Ansai's (山崎闇斎) Shintoism

Keishi Hosoya

Faculty of Art, Ryotokuji University

Abstract

In the end, Yamazaki Ansai's studies returned to Shinto. It would be safe to say that the fact that the starting point of his studies was Neo-Confucianism had a significant influence on Ansai's Japanology. Among the various Shintoisms in early modern times, Ansai's Suika Shinto held an extremely unique status. Suika Shinto contains elements of the theory of li (理) and qi (気) found in Neo-Confucianism and, more specifically, the Song dynasty Cheng-Zhu school; in fact, one could say that it was conceived of on a base of Neo-Confucianism.

In particular, tsuchikane no tsutae (土金伝, "tale of earth and metal") as a scholarly theory is an important clue in understanding the ideas purported by Ansai's Suika Shinto. Ansai saw earth (土) as the base element which created and composed all things. One can see that Ansai esteemed earth above all, and stressed the importance of it in addition to metal (金), which is born from earth. As earth creates all things, earth contains all things, and one finds commonalities with the concept of respect (敬). It can be surmised that Ansai perceived this as images and abstract concepts developed from the sounds expressed in words.

Keywords : Yamazaki Ansai, Suika Shinto, Neo-Confucianism

山崎闇斎の神道説について

細谷 恵志

緒言

闇斎は元和四年（一六一八）に京都に生まれ、始め妙心寺に入って僧となり絶蔵主と呼んでいた。豪放で師の命に従順でなかったため、土佐国の吸江寺に移された。この地は所謂南学すなわち土佐における朱子学の本場であった。そこには谷時中や野中兼山などといった有名な朱子学者がいたのである。吸江寺に在中で、谷時中や野中兼山と交わり朱子学を受けたのである。闇斎の学問は最終的には神道に帰着するのであるが、その学問の出発点が朱子学であったということがその後の解釈に大きな影響を与えたと言ってよい。山崎闇斎の垂加神道は近世に於ける諸種の神道説の中でも極めて特殊な地位を占めている。この垂加神道は、朱子学すなわち宋学に於ける理気説の要素があり、寧ろ朱子学の基底の上に構想されたものと言える。闇斎は晩年に至り神道の唯一を主張しながら、その倫理説は儒教思想を継承したものであって、それを説くにわが国の古語を以てしているところが多く見受けられる。闇斎の神道説である「土金伝」についての思索、哲学について考察することとする。尚、一部を除き、漢文は書き下し文に改めた。

一、「大日靈貴之道」「猿田彦の神之教」について

『風葉集』は、一度は禅僧となった闇斎が還俗し、朱子学を学んだのちに神道に傾倒したときに著されたものである。この首巻に次のことが記されている。

翁謂へらく、道は則ち大日靈貴之道、而して教は則ち猿田彦の神之教なり、道を学ぶ者は敬て思へ

即ち「大日靈貴之道」とは、天照大神の道である。周知のとおり大日靈貴は『日本書紀』にでてくる『古事記』の天照大神ことである。闇斎はわが国における道は「大日靈貴之道」であると規定している。「道」という考え方はまさしく儒学による影響であり、儒学の書籍に「道」とよく出てくるが、これは儒教の学問を意味しており、根幹、道理、きまりという要素を含んでいる。したがって、闇斎はここで敢えて「大日靈貴之道」と言い、わが国の基幹は「大日靈貴」を端緒として継承してきている系譜にあると考えていたことが分かる。そして教えは「猿田彦の神之教」とあるが、猿田彦は邇邇芸尊の降臨の際に先導をした神である。皇祖である大日靈貴の孫、邇邇芸尊の案内役という重要な位置にある。天鈿女命（天宇受賣神）が猿田彦に皇孫はどこに至るのかと問うと「天神の子は当に筑紫の日向の高千穂の櫛觸峯に到りますべし。吾は伊勢の狹長田の五十鈴の川上に到るべし」と答えた。大日靈貴は葦原中国で幾久しく栄えるようにと願い皇孫を向わせたのであるから、邇邇芸尊は重任を負って降臨しなければならなかった。そしてこの皇孫を筑紫の日向の高千穂の櫛觸峯に到らせたのが猿田彦であり、仕事を終えて故郷の伊勢に戻るのが大筋である。すると、闇斎の言う教えは高天原から葦原中国にその子孫を然るべき地に導いた教えということになるのだろうか。伊勢の大神であった猿田彦が労して、皇孫を出迎え遠い筑紫日向高千穂へ厭わずに案内をしたそのことを言うのであろうか。皇祖を敬い皇孫を大切にした行為を讃えるものか。「道を学ぶ者は敬て思へ」とは、神道の大本につつしんで思いを馳せなければならぬといったものであろう。こうした説明の方法は、朱子学を学んだものであることを窺わせるものであり、朱子学では物の道理を天地の道などというが、闇斎のここでのいう道とは神道の、あるいは日本民族の大本を明らかに世間に示すことが目的であったという意図を察することができる。まず大日靈貴を掲げたことはよく分かるが、猿田彦を特筆している点を注視しなければならない。猿田彦は天孫降臨における功労者である。そして猿

田彦も神であるがその皇祖皇孫にお仕えするという象徴的存在として高く評価したと考えることができる。さらに天孫降臨における功労者というだけでなく、伊勢の神であるというところにある種の因縁を覚えていたと暗に思わせるものである。

中世になり神道は宋学の影響を受けてさまざまな主張が表れた。学問的に神道を解明せんとするならば中世の神道書を正しく解説する必要がある。闇斎はどのような書籍を採取したのであろうか。門人である谷秦山が

垂加社の神道、大いに諸説に勝るもの他無し、偏主無きなり。忌部流は之を石手帶刀に聞き、卜部流は之を視吾に聞き復た之を土津に質し、伊勢流は之を信守及び大宮司精長に聞き、賀茂の説は之を梨木に聞き、諸家の秘を集むること此の如し、実に千金の裘なり。

『秦山集』第十五卷甲乙録一

といっているように忌部氏をはじめ当時の神道各派に亘り、諸家に伝承する所を学びそれを取捨し、そして自らの神道説を建てるに至ったものである。その中でも最後までその神道思想の中心に置き垂加の名のものと成ったものは伊勢神道である。伊勢神道は神道五部書即ち『寶基本紀』、『御鎮座伝記』、『御鎮座次第記』、『倭姫命世紀』の五書を根本とし、両部神道より脱化し、宋学を取り入れ、天壤無窮の神勅を中心に、三種の神器の道徳的政治的意義を強調して、神道を日本的に表現しようとしたものである⁽¹⁾。「垂加」の語は次の如く「神道五部書」の『倭姫命世紀』をその出典としている。垂加社語に

神の垂は祈禱を以て先と為し、冥の加すは正直を以て本と為す、此神託、鎮座伝記宝基本記、倭姫の世記に出たり、嘉か自賛に神垂祈禱冥加正直、我願くは之を守り身を終るまで忖ふこと勿れ

『垂加草』第一

とあり、「神」に就いて闇斎は

神字の倭訓上の字と同じく、鑑の字の倭訓にして、上観の二字と同

くして下土を照臨するの謂なり（『風葉集』卷第一神代上）とし、また陰陽五行の主即ち太極に比して『垂加草』第十「伊勢太神宮儀式序」に

夫れ神の神為る初より此の名此の字有らざるなり、其れ惟妙にして測られざる者の、陰陽五行の主と為りて、万物万化此に由りて出ざる莫し、是の故に自然に人声に発して、然して後此の名此の字有るなり、日本紀に所謂国常立と者、乃ち尊奉して之に号するなり

としている⁽²⁾。また、理気による説明を施して「会津神社志序」に
蓋天地の間、唯理気与にして神なる者、理の氣に乗じて出入する者、是の故に其の氣正しければ則ち其神正し、其の氣邪なれば則ち其神邪なり（『垂加草』第十）
としている。

二、『日本書紀』神代卷研究について

「山崎先生神道辨」は跡部良賢と浅見綱斎との問答書で、垂加神道を考える上で参考となるものである⁽³⁾。その中で良賢は

鄙生竊ニ存候ハ神道ノ事、家々ノ伝、口授ハ、老仏ヲ不会シ、或ハ聖書ヲ附会シタルモノ多シ、日本上古ノ神道ハ、旧事記、古事記、神代卷、古語拾遺、中臣祓是レ全書ナリ、自是外ニ求ル事ナシ、御鎮座次第記、伝記、本記、大和姫世記ノ類モ、皆右ノ書ニ本キタルモノナリ、根本トスル処ハ右ノ書ニシテ家々ノ口授モ皆是ヲ本トス

とあり、闇斎の神道説も『舊事記』、『古事記』、『神代卷』、『古語拾遺』、『中臣祓』、『御鎮座次第記』、『伝記』、『本記』、『大和姫世記』等の諸書を主として述べられている。その中でも最も『日本書紀』神代卷を重く見ている。神代卷研究書中の『風葉集』五巻と『神代卷講義』を見てみると、『風葉集』は『日本書紀』神代卷に関するこれまでの諸家の説を集め「翁曰」として独自の見解を述べており、博覧強記な闇斎の研究態度を知るこ

とができる。

次に闇斎の説について観ると次のように

我神道四、造化、気化、身化、心化、造化、心化して形無きなり、身化して体有るなり。此れ神代を学ぶ者、まさに知るべき所なり。又曰く、天神七代は、造化の神、地神五代は身化の神、伊弉諾尊伊弉冉尊は造化気化の神号を兼ね。卜部の未生の伊弉諾伊弉冉、已生の伊弉諾伊弉冉の説は正に此れを謂ふなり（『風葉集』首巻）

神道に四ありとして、造化、気化、身化、心化としている。また、造化、心化して形無きなり、身化して体有るなりとして、神代を学ぶ者まさに知るべき所とし、また天神七代は、造化の神、地神五代は身化の神、諾冉二尊は、造化気化を兼ねとし、卜部の未生の伊弉諾伊弉冉の説はこれを謂い、また続いて

未だ生ぜざれば則ち、天の陰陽造化の神なり、已生なれば則ち人の男女気化の神、二尊国土山海艸木を生み、而して天照太神を生む、此れ天地唯一の道なり（『風葉集』首巻）

と述べている。また、唯一については

翁謂へらく、道天人を貫く、是れ唯一を謂ふなり。儒仏を混ぜざるを謂ふ、唯一と為す者、甚だ非なり。雑ふるに外国の説を以てす、是れを習合と為す。唯だ仏説を混ふと謂に非らざるなり（『風葉集』首巻）

とし、『唯一神道名法要集』中の大織冠の語を引いて

吾が唯一神道は天地を以て書籍と為し、日月を以て証明と為す

（『風葉集』首巻）

とし、儒仏を混入するを是認する立場は『名法要集』の神道を根本とし、儒仏を枝葉花実とする、根即ちわが国の神道を培ふ為に、震旦天竺の二教を用ふべしとする日本学的世界観を打ち出している。そして、天人唯一について

天神七代男女の字を用ゆ、二尊浮橋に立ちてより陰陽の字を加へた

り、又人に天神まします事を明せり、二尊を天地五行の神に配するは、即天地五行ごとくそなはりたまふに依てなり、浮橋より陰陽の字を用ゆるは、天を以て人をかたり、其間又夫婦の字あり、少男少女の字あり、皆天人をときませて唯一の道をあかせり（『風葉集』首巻）

とするのは「垂加社語」に、二代より六代に至る水火木金土の序は『神皇実録』『名法要集』に見ゆとし、

天神一代は、天地一気の神、二代自り六代に至る此れ水火木金土の神、第七代は則ち陰陽の神なり、（『垂加草』第一）

水火之神尊号格一つ、陰陽を分つ所以なり。木金土神尊号各二つ、陰陽耦生を明にする所以なり。（『垂加草』第二）

とあることも、重要なことである。そしてまた

翁曰く、天神国常立尊、地神天照太神、天地交互して之を号る者なり、（『風葉集』首巻）

とあり、ここには五行説により神代巻を解こうとする態度を知ることが出来る。闇斎は「神道五部書」は五行説を以て神代を説く典型的な書で外宮の祭神を内宮より貴んで水徳とし、内宮を火徳とし、水は火に克つとしていることである。即ち

以代水徳未だ露れず、天地未だ成らず、瑞八坂瓊之曲玉を九宮に捧ぐ、即ち水変じて天地為り、天地起成て人民化生す。名を天御中主神と曰ふ、故に千変万化して一水の徳を受く、続命の術を生ずるが故に名亦た御饌都神と曰ふなり。古語に曰く、大海の中に一物有り、浮べること形葦牙の如し、其の中神人化生す。天御中主神と号す。故に豊葦原中国と号す、亦た因て以て天照止由氣皇太神と曰ふなり……御饌都神天御中主尊、大日靈貴天照太神と、予め幽契を結ぶ、永く天上天下を治むるなり（『御鎮座次第記』）

外宮の祭神を天御中主神とし、御饌都神、国常立尊と同一神としている。「五部書」のこの立場は、内容に比して外宮の地位を向上せしめようとする

外宮神官の意図から出たものと批判されているが、これは五行思想によることは明白である。闇斎が国常立尊を天神とし、天照太神を地神とするのは、前述のように「五部書」の流れをくむものと考えられる。尚『神代巻講義』に於いて

内宮御神体天照大神 相殿手力雄神 拷幡千々姫命

外宮国常立尊天御中主尊御事 相殿天兒屋命太王命瓊々杵尊

コレハ只今ノ御鎮坐ノ様子也、(中略)御神記ノ事五部ノ書ノ鎮坐伝

記二アリ

とし、『三種神宝極秘伝』にも

伊勢の外宮は、八坂瓊曲玉の化せし所、内宮は、白銅鏡の之化せし所、水火幽契二宮一光なり

とするのも同じ考えのものである。因みに『風葉集』巻第三には『日本書紀纂疏』を引き、五行を以て神代を説き「五行相生之序を以て而して言へば則ち云々」又「則ち五行相尅を明にす」とする所を是認している。

次に『神代巻講義』であるが、同書の記載によれば「此講義ハ至テ初門ヘノ御示シトミヘタリ」とあり闇斎の録する所である。書中盟珠誓約の段に、二神交合説を否定しようとして会津侯と吉川惟足、山崎闇斎の三者間の意見交流に及び、岩戸の段は造化人事を兼ねて語るとし、また祓について甚深の伝ありとして

ハライト云トアラヒト云事ヲカ子テ云タモノゾ、ハラヒト云ハ、心ノハライ、アライト云ハ、身ノハライゾ、金銀財宝ヲハライスステサシアゲテ身ノケガレヲサリ、手水ヲツカイ湯行水ナトヲシテ身ヲキヨムルナドガ皆身ノハライ也。……トカクハラウト云事ハ、アシキ事ヲハラITEヨイ様ニスルト云事ジヤ、国ニワルイ者アレハ、ソレヲ退治スルガハライゾ、アシキ一揆盜賊凡天下国家ノ害ヲナス事ヲハ皆治メハラウガハライゾ……上天子ヨリ下万民ニ及マテ皆被ノアルト云事ハカウシタ事ゾ、トカク身ノ惡ヲハライ去事ゾ、外清浄ヲシテ身ヲキヨ

ムレハ即心モ清クナルゾ内外一致ナリ

とするが、ここでは『日本書紀纂疏』の内清浄、外清浄を説くことに依り、大祓の精神をも説いていると考えられる。そして天上を以て大神の御禁中ある所、即ち大和とし「天孫ノ筑紫へ降臨ナサレタト云モ大和国カラ御座ナサレタ事ゾ」と高天原皇都説を採り、「事代主ハ日本ノ泰伯ソ」と云い、十種神宝、庚申伝、本地垂迹、権現にまで言及している。

三、「土金伝」について

「土金伝」は垂加神道の教義の出発点であり、また全体の根幹をなしたものである。特に留意しなければならないのは、それが敬を中心とした、朱子学的解釈である五行を以てしていることである。『神代巻講義』(続山崎闇斎全集下巻)により「土金伝」の思想を示すと次の如くである(4)。長くなるが全文を引用し示すこととする。

一大事ノ神道ノ入派ノ伝ガアル、是ヲシライデハ神代巻ヲ読時ニ、ソレハソレハ其事ヨトキニ一度一度デ合点ガ行カヌ、是ヲ知テサヘ居レバ神代中デ、ドコデモ、ソレハソレソノ事ヨト云テ聞シテ皆合点ノ行ク筋ガアルゾ、サテ是ハ神道ノ入派ニシテ、モハヤコレデ神道ノ始終ハスム事ゾ、先コウ合点セヨ、扱ソレハ皆共モ聞及デ居ル事モアラウ。土金ノ伝授ト云事ゾ。此ガ先神道一大事ノ伝ゾ。

(『神代巻講義』続山崎闇斎全集下巻)

このように「土金伝」の地位は、「神道一大事の伝」であつたことが分かる。

ソレハ何トシタ事ゾト云ヘバ、先ヅ土ハ五ツ云事、土ヲ五ツニトリテアル事、神代巻ヲ覚ヘテ居ルカ、伊弉諾尊ノ軼遇突智ヲ斬ツテ五ツニナサレタ、ソレガ只聞ケバ何トシタ事ヤラ知レヌ、則チアレガ土ヲ五ツニナサレタ処ゾ、此ヲハヤ河図洛書ノ五ト丁度同ジ事ジヤ、ト云ヒタガル、ソレガ則チ両部習合ノ事デ惡イト云ニ不及、何ト云事ハナ

イ、日本ノ道ニ神代ヨリ箇様ニ仰セラレタ事ゾ、サレバ神聖之道不約而合ト云ツタ此様ナ事デコソ云タレ、ソレヲサウ附会スル様ナ事デハナイ、此ハモハヤ何ノカノト云事デハナケレドモ序ニ云フゾ、扱土ト云訓ハイッ、ト云事、イツチト云事ゾ、ツ、ク、ツ、マルト云フ義ゾ、サテ此ノ土ハ火カラデナケレバ出来ヌゾ、火ト云ハ則チ必ゾ、心ニ神ハ宿ラセル、ゾ、コレ常ニ伝授スル時ハ云ヌ事ナレドモ、ソチガ能ク心ニ徹シテ合点ノ行ク様ニト思ツテ大事ヲ云テ聞カス、阿蘇神社ヲホコラト云フガ大事ノ秘訓ゾ、凡テ神ノ御座在処ヲホコラト云、ホコラトハ火藏ト云事ソ、火ハホト通ズ、ホノヲホノコナド云ソレデヒコラト云、去程ニツ、シミト云フモノハ心デナケレハ生ゼヌソ、面白イ事テハナイカ、心ニテナケレバ神ハヤドラセラレヌソ、ソレデ火ノ神軻遇突智ヲ斬ツテ五段ニナサレタ、火生土ノワケヨリ合点ノユク事ゾ、サテアノ土バラバラシタ処ニハ何モ物が出来ヌモノゾ、土ノジツトカタマリタ処テナケレバ、物ノ生スルト云事ハナイゾ、ソレデツ、シムト云訓ハ土ヲシムルト云事ゾ、土ト云モノハチツトシマリタモノゾ、ヂツトニキリタモノゾ○此時先生チツト両手ヲ握リテ御見セ被成候○水ナドハ下ヘサカリユクモノゾ、土ハ水ノ様ニ下ヘサカルモノデハナイ、ヂツトシメヨスルモノゾ、其ヂツトシメヨスル処デ物ハ生ジタモノゾ、殊ニ金ノ生スル山ハイコウカタイモノシヤ、ツント土ノ精髓ヲ一所ヘスイヨスルト見ヘタ、金ハ土ニ兼テアルモノテ金デ土ガシマルゾ、ソノヂツトシマルノテ金ハ生ジタモノゾ、ガンサリト今日目ノ前ニヨクミヘタ事、土デナケレハ物ハ生セヌゾ、去ル程ニヂツトシツ、シンダ処デナケレバ金ハ出来ヌゾ、其ツ、シミハ則チ人ノ心ニアルゾ、丁度土ノバラバラシタ処ニハ物生ゼヌ様ニ墮落放逸ニトケタ体デハ金ハキザソウ様ガナイゾ、神前ヘ参タ時ノ心持ゾ、金氣ト云ハ別ノモノテハナイ、アソコノツントユルサヌ処カアルガ、金氣ソツントサシツマリテコロス道理ニナリテカラハ、人テモツントコロスモノ

ゾ、少シモユルサヌ心ノ去程ニ、キツカリトシテユルサヌ処ソ、目ニ見ヘタ通りテ土カラデナケレバ、金ハ生セヌ土生金ノ道理ゾ。

〔『神代卷講義』続山崎闇斎全集下巻〕

「神道一大事の伝」が「土金の伝授」にあることを述べ、そしてこの「伝授」をめぐる「火生土ノワケ」と「土生金ノ道理」が説かれている。「伊弉諾尊ノ軻遇突智ヲ斬ツテ五ツニナサレタ」ことは、『日本書紀』神代上（第五段一書第八）に「伊弉諾尊、軻遇突智を斬つて五段いつたに為す。此れ各々五の山祇と化れる」とあるのによる。また『中臣風水草』にも「伊弉諾尊、火神軻遇突智命を斬りて五段いつたと為す。是れ火、土を生む、五土神なり」とある。

コレモ先ニ云通り火生土、土生金ジャト云テ合フタト思フハ悪イゾ、儒書ニドウ云ツテアラウト、何ト云ツテアラウト何ト云事ハナイ、日本ノ神代ノ道ガコウゾ、今日ノ前ニキツカリト見ヘテアル事ゾ、シタニヨツテ天照大神ハ御女体デゴザナサレドモ、素戔鳴尊ノ時ハ劍ノ御装束有タゾ、又伊弉諾尊伊弉冉尊ノ御時モ、弓ト劍デ決メサセラレタゾ、ツント昔カラ日本ハ金氣デ治リテアルゾ、俺ガ平生日本ハ金氣ノ国ト云モ斯ウシタ事デゾ、畢竟ツ、シミデナケレバ金氣ノキザソウ様ガナイゾ、ツ、シミハ則チ心ニアルゾ、土金ノ事ニツイテ甚深ノ事ガアレドモ、ソレハ亦ソチガ様ナ者ニ云テ聞サル事デハナイ、亦ソレ程ノ徳義ガ無テハ云テ聞サヌ事ジャゾ、先コレガ一大事ノ入派ノ土金ノ伝授トハカウジャゾ、ヨクヨク合点スベシ、

〔『神代卷講義』続山崎闇斎全集下巻〕

神代卷中に於いて土金の思想を最も鮮明にし、垂加神道の特色を示すのは、素戔鳴尊と大己貴命の段である。

○国ノ中ニ所レ未成者……手時神光照レ海、忽然有ニ浮来者一曰……コ、ガ大己貴ノヒカリ物ノ伝ト云テ大事ノ一分ノツント伝ニナリテアル事ソ、因言今理此国唯吾一身而已云云、コレガ大己貴ノ慢心ゾ、ツ

ント吾身一ツデ何モカモ皆治メタト被仰テ慢心ノコトバゾ、タレカ吾ト一ツニコレヲサメル者ガアルカト被仰ソ、コ、ニ身ト云字ヲカイタガ大事ゾ、身ト云ハコノカラダゾ、身ノ事ゾ、大已貴ノ思召ニハコノ身ノカラダノコノ一ツノ身デ何モカモグツタイラゲタ、タレアツテカコレニセウモノハナイ、ツント一身デシスマイタト思召タ、スベテ此段が大已貴ノ心法ヲ御サトリナサレタ所ゾ、今ノ如クニツント此我身デ皆功ヲナシタト思召キツテ御座ナサレタトキニ、神光照海忽然有浮来者ゾ、ツント今ノ様ニ思召キツタ時ニハ、アト御心中ニ覺ヘサセラレテハ、ア、何ヤラ怪シイモノガアル、トキツト心ヲモツケサセラレタゾ、今マデハ吾コノ形ノ身デ何モカモ皆成就セタト思召キツテ御座アル所ニ、コノ身デシタモノデハナイ、此ノ身ニアル此ノ心ト云モノガアル、ト此心ガアリテ之ヲミナシタコトヨト心ヲミツケサセラレテ悟ラセラレタ所ゾ、コノ段ハ心ゾ、ソコヲ于時神光……ト云タ事ゾ、海ウナハラト云フガ我腹ノ事ゾ、カウ訓ヲカハシタモノゾ、ソコカラノ怪シイモノガ、キラリト出デ、云ハ如^モ吾不^シ在——ト云ゾ、コ、ガ大已貴ノ今マデハ吾コノ身一ツデ皆シタト思召ス所ニハ皆コノ心ノスル事ジヤト御合点ナサレタ事ゾ、スベテコ、ハ自問自答ゾ、浮ムト云字ナドガ云ニイハレヌ面白イ字ゾ、キツトソウ思ツメテ御座ナサル、所ニ、アソコヘドコトモナウハア、トラボヘタ所ソ、コ、ラハ吾身デヨク引キシメテ合点スベシ、イヲフ様モナイ大事ノ所ゾ、キツト吾身ニ心神ノヤドラレタ処ヲサトラセラレタ所ゾ是時……キツトラホヘサセラレタトキニ、ソコデ大已貴ノマツカウシタモノハコレハナントシタモノゾ、ナンゾト自問自答ナサレタゾ、ソコデ自ラ御合点ナサレテ、コレコソ則是心神也トシラセラレタゾ、ソレガ対曰吾是ゾ……幸魂奇魂ハ心神也則魂魄也トシテモ、アレハカウトシルガ幸魂、アレハコレトワケヲシルガ奇魂ゾ……

大已貴神曰唯然廼知汝是吾之幸魂奇魂ト被仰タガ則心神ヲキラリト御

サクリナサレタトコロゾ、寔ニ吾一身デシタト思ヘバ、コノ心神ガ吾ニ備リテアリテ、是ガスルトコロヨト心法ノ本源ヲサトラセラレタトコロゾ、今欲何処住耶ト被仰タハ則コノ心神ハイヅクニ住マント思フゾト自問セラレタゾ、ソコデ日本国ノ三諸山ニスマント思フト思召タゾ、ソコデ直ニソレヲ御勸請ナサレタゾ……三室ノ山ニ住マント思召ス、其御心体ヲ則三室ノ山ニ自御勸請被遊タソ、コレデ山輪ハ宮タチガナイゾ、アノ山ガ則御神体ゾ、アレニ住マント思召タ御心ヲスグニ御勸請ナサレタトコロゾ……ソウシテ三室ノ山ハヨソニハナイ、則チコノ身ゾ、此ノ身ニカノアヤシキ光ノ心神ハ、キツト宿ラセラレタゾ……

ツント右ノ段々コノ所ノ伝授ガ神道の殊勝ナマコトト氣ノツクトコロハコ、ラヲ能ク窺フベシ、妙ナ事ゾ、神道至極大事ノ事ドモ色々ノイリワリノ大事ドモカクツト素戔鳴ト大已貴ノ事デ皆スムゾ、素戔鳴モ大已貴モ皆器量ノタケイ神ゾ、ソウシテ又素戔鳴モ、始メハ悪敷事ヲナサレ、大已貴モ始メハ自分ノ功ニホコリテ上ヘ從ヒ給ハナシタ、ソウシテ素戔鳴ハ遂に御德義改リテ日神ト御一体ノ御德義ニナラセラル、大已貴神モ丁度同ジ様ニ又コ、デコノ様ニケツカフナ御德義ニナラセラレタゾ、段々不及申、ソウシテ此ノ御両神デ、グツト大事ノ神道ハ皆済ゾ、面白イ事ゾ、(『神代卷講義』続山崎闇斎全集下卷)と説いている。土金については「土津靈神の碑」において

我が神国伝来唯一宗源の道、土金に在り、而して土は即ち敬むなり。蓋し土は敬と倭訓相ひ通ず、而して天地の位する所以、陰陽の行く所以、人道の立つ所以、其の妙旨此の訓に備る(『垂加草』第三十七)と神国が継承してきた一つの源は「土金」にあるとしている。「土」は「敬」であり、和訓が共通しているという。これを更に「藤森弓兵政所記」に敷衍して土金の伝は神代巻に備わっているとし、

蓋し之を聞く、天地の間土徳の翕聚して中に位するなり、四時此に

由りて行われ、百物此に由りて生ずるなり。此の倭語、土地之味、土地之務の謂ひ、敬字に訓ずる所以なり（『垂加草』第六）

と述べている。すなわち「土徳」の中に万物があるという考えである。五行の中では中位に位する土徳を以て「一心の主宰にして万事の本根」「聖学始を成して而終を成す所以の者」（『大学或問』）とされている。『神代卷講義』において、土金の伝授は神道の入門にして始終「神道一大事の伝」とし、土について

土ハ五ツト云事、土ヲ五ツニトリテアル事、神代卷テ覚ヘテイルカ伊弉諾尊ノ軻遇突智ヲ斬テ五ツニナサレタ、アレガタビキケバ何トシタ事ヤラシレヌ、則チアレガ土ヲ五ツニナサレタ処ゾ（『続山崎闇斎全集下巻』）

とし、更に続けて

扱土ト云訓ハイツ、ト云事、イツチト云事ゾツクツノマルト云義ソ、サテコノ土ハ火カラデナケレバ出来ヌゾ、火ト云ハ則心ゾ、心ニ神ハヤドラセラル、ゾ（『続山崎闇斎全集下巻』）

とし「ツツシミ」の訓に進み

アノ土ノバラクシタ処ニハ何モ物ガ出来ヌモノゾ土ノジツトカタマリタ処テナケレバ、物ノ生スルト云事ハナイゾソレデツ、シミト云訓ハ土ヲシムルト云事ゾ土ト云モノハチツトシマリタモノゾ、ヂツトニキリタモノゾ（『続山崎闇斎全集下巻』）

金については

金ノ生スル山ハイコウカタイモノシヤ、ツント土ノ精髓ヲ一所ヘスイヨスルト見ヘタ金ハ土ニ兼テアルモノテ、金デ土ガシマルゾ、ソノヂツトシマルノテ金氣ハ生ジタモノゾ……其ツ、シミハ則人ノ心ニアルゾ、丁度土ノバラクシタ処ニハ物生ゼヌ様ニ墮落放逸ニトケタ体テハ金氣ハキザソウ様ガナイゾ神前テ参タ時ノ心持ゾ……土カラデナケレバ金ハ生セヌ、土生金ノ道理ゾ、コレモ先ニ云通り火生土土生金シ

ヤト云テ合フタト思フハワルイソ儒書ニトウ云テアラフト何ト云テアラフトナニト云事ハナイ、日本ノ神代ノ道ガコウゾ……ツント昔カラ日本ハ金氣テ治リテアルゾ、ヨレガ平生日本ハ金氣ノ国ト云モカフシタ事デソ畢竟ツ、シミデナケレバ金氣ノキサソウ様ガナイソ、ツ、シミハ則チ心ニアルゾ（『続山崎闇斎全集下巻』）

としている。このことは五行相生説に依る事は云うまでもない。また『玉籤集』所載の「土金之伝」には

土の訓は、つゞく、つゞまる、いつ、金の訓は、かねる、ねる、此古来よりの訓伝也、土有ば必金あり、金は土に兼てある也、土金は相離れぬ物也、土しまれば金を生ず、金にあらざれば土しまらず、土しまりたる是をつ、しみと云、人体は土也、人体をつ、しめば金生ず、土金にあらざれば人全からず、嘉謂らく、面足尊、惶根尊土神なり、面足は人体具足なり、惶は加志古と云ふ、賢字の訓にして惶の字を書くは、敬は賢の根為るを示すなり。伊弉諾尊、伊弉冊尊は、面足惶根尊の子なり、故に常磐連曰く、人敬を得て生る。敬は土地之味と云ふ、土地之務と云ふ。五は土なり、と。口訣に曰く、伊菟津は土なり、伊弉諾尊軻遇突智命を斬り五段と為す、此れ各々五山に化して、此の火土を 生じて五の言の本と為すなり、と。色布知八箇祝詞に云ふ、天地の体は土なり、性は金なり。故久堅の天、荒金の地なり、と。鎮坐本記に曰く、人乃ち金神の性を受く、須く混沌の始を守るべし、と。とし（5）、玉木正英は「口伝」に

土しまれば金生ず、土金全して堅固也、……人身を敬は心に存す、つ、しまざれば放心す、故に敬を主とす、……素戔鳴尊は金過玉ふ故、勇悍ふして残傷り給ふ、又金なければ土しまらず、柔弱にして蛭児の如し、土金全備して身心を脩守るべし、
としている（6）。

然らば則ち日本紀を盍埋するや、夫れ我が神道の宗源、土金に在り

て、而して其の伝悉く此の書に備れり、

(山崎闇斎全集上巻『垂加草』巻六、藤森弓兵政所記)

ここでは「土金」は「神道」の宗源であり、それは『日本書紀』に備る。と述べていることから分かるように闇斎が重んじているのは『日本書紀』である。先に述べた猿田彦の教も『古事記』よりもむしろ『日本書紀』からであることは云うまでもない。

また「土金ハツツシミノ道体ナリ」(『神代卷講義』)「スベテ神書デ土ト云所デハ必ス念ヲ入氣ヲ能付テ見ルベシ、」(同上書)とある。『夷子大黒記』にも

大黒は大巳貴命なり、其の袋を負ひ、及び俗に称する使鼠の事、舊事本紀に見へたり、其の槌を持つや、蓋し槌は土地なり、則ち地主の神、敬の表なり(続山崎闇斎全集上巻「続垂加文集」巻之上)

とあるように、蓋し槌は土地つちと解釈し、これが地主の神である。敬をつつしむと解釈しこの表なりとしている。近藤啓吾氏は『神代卷』の講義のうちから神名を説いたものを拾ひ、意を取って口語訳したものであり、この両例を見ただけでも、その解釈の文体を察しうるであろうが、これは神名の解釈のみに止まるものでなく、神籬(ひもろぎ)は日守木の意であるとし、賜るは玉分る(たまわる)の意であるとし、敬しむは土しまる(土金)の意であると説いてゐることにより、一段と明らかになるであろう。このような解釈は今日の国語学者から見れば無稽にして一顧の値さへなしとされるであろうが、これは彼が放肆に説いたものでなく、鎌倉時代以来、家学として神道古典の解釈を重ねてきた吉田家の研究の成果が凝縮してゐることであつて、国語学の是非を超えて神道の本義に直入してゐるものがある。……決してそのような軽いことばの遊びではなく、国語の本質の上に立つて神書を読まんとしてゐることを示すものなのである。」と述べられている(7)。言葉にあらわれた音としての調べから発展したイメージ、抽象的概念としてこれを捉えたと推察できる。闇斎の「土金伝」

を考えるに当つては朱子学における理気陰陽五行だけでなく、朱子学が基き且つ我が国にも行はれた朱子以前、漢代を中心とする五行説についても考え、五行説を以て我が国の創世紀を論ずる闇斎以前の学説をも考える必要がある。漢代五行説を集成した隋の蕭吉の『五行大義』五巻は、我が国にのみ存しており、『日本国見在書目録』五行家の部にも著録されている。五行説は漢代において特に顕著であり、我が国においても古くより行はれ、その思想の影響は大きいものがある(8)。『神皇正統記』の本となつたとされる外宮称宣度会家行撰『類聚神祇本源』巻一、天地開闢篇には、巻頭に周子の「太極図」を掲げ、「通書」の言を引くと共に「五行大義曰」として巻一の論数、論相生の文を引用していることから、五行説を以て我が国の神代創世を解く事は広く行はれていたことが分かる。

結語

闇斎の思想を考察する中において、闇斎が発信しようとしたものは何かという視点を見失わぬように闇斎の残したまたそれに関連する文献を咀嚼した。国語学的立場からは闇斎の言葉の解釈は牽強附会なものとして扱われるが、ここでは考え方としてこれを検討した。国語学的な正答を議論することを求める立場ではない。とくに闇斎の垂加神道と称される思想を理解するために、学問的な理論としての「土金之伝」が重要な手がかりである。闇斎は万物を創造し構成する要素の根元を「土」とみなしている。闇斎はとりわけ「土」を重んじ、さらにそこから生じる「金」と合わせて重視したということが分かる。「土」の和語は「土地之味」、「土地之務」を言うのであり、「敬」と関連づけている。言葉に対する意味を闇斎なりに深く斟酌していることが伺える。「土」が万物を創造するということは「土」がそうしたものを内包するということであり、「敬」の概念との共通性を見出したのではないだろうか。言葉にあらわれた音としての調べから発展したイメージ、抽象的概念としてこれを捉えたと推察できる。こうした「土

金之伝」に示された思索、哲学は闇斎が成し遂げようとしたものは何であるかを示唆している。宋学の理気論の語を借りながら、神道の淵源を論理的に構築しようとしたのである。いくつかの古い文献を読み解き、わが国の純なる教えにたち還ろうとしたことがよく表れている。

平成二十五年十月七日 稿

注

(1) 吉見幸和は『神道五部書説辯』に於いて、神道五部書は一は行基の作、二三は雄略天皇の御代阿波羅波命の作、四は継体天皇の御代飛鳥の作、五は天武天皇の御代の作といわれているが、実は何れも治承以後永仁以前、外宮の神官が外宮の地位を高めるために偽作したものである、としている。その中には、わが国を神国とし、清浄を尚び正直を重んじ上古の簡素を喜ぶ思想が述べられている。

(2) 闇斎は宋儒の「太極図」に深く傾倒し、その哲学体系とわが国の創世紀とを習合し、天御中主神及び神代諸神の名を「太極図」に配し理気による説明をしたものである。『本邦儒学史論攻』二五四頁参照。

(3) 「山崎先生神道辨」写本、『道学資講』九十八頁所収。

(4) 『山崎闇斎と其門流』に、「掲げた条項の解釈は、蓋し神代巻中に於いて最も精彩を放ち、直昆の精神を説いては敬みの徳義の重んずべきことを卒直に示され、我神道に具有せる甚深の道の本質を発揮闡明して餘蘊なしと申すべきであらう。神道に於ける土金の敬礼の骨子は右に尽くると称してよいであらう。」と記されている。『山崎闇斎とその門流』伝記学会 昭和十八年五月十日発行 明治書房 二十八頁参照。

(5) 山本信哉編『神道叢説』二五六頁参照。

(6) 山本信哉編『神道叢説』二五七頁参照。

(7) 近藤啓吾著『続々紹字文稿』拾穂書屋蔵版 百頁参照。

(8) 吉川惟足『土徳編』、『未生土伝』(享保二十年八重垣翁識とある。)

両書共に続々羣書類従第一神祇所収。

査読終了年月日 平成二十五年十二月三日